

⇒【豊葦原瑞穂国（とよあしはらみずほのくに）】

日本の美称で、水生生物である葦が生い茂り、みずみずしい稲の穂が実っている国という意味。

## 1. 水循環と私たち

日本は古く「**豊葦原瑞穂国**」と呼ばれていたように、豊富な水に恵まれていました。

私たちが住む名古屋地域も、水と深い縁があります。名古屋周辺には木曾川、長良川、揖斐川の「木曾三川」や、庄内川などの大きな河川があります。この地域は、昔の東海道の中で唯一、海路があった地域です（宮の渡し）。また、名古屋城築城とともに開削された堀川は、街なかを流れ、400年もの長い間、市民に親しまれています。

一方、水との闘いも多くあり、過去に何度も木曾三川や庄内川などの氾濫による洪水や土砂災害に悩まされてきました。1959年の伊勢湾台風や2000年の東海豪雨でも、名古屋地域は大きな被害を受けました。濃尾平野の海拔が低いことも水による災害を多くしていました。

だからこそ、名古屋に住む私たちは、水の恩恵と怖さを熟知した上で水に接していかなければなりません。

### ●循環する水

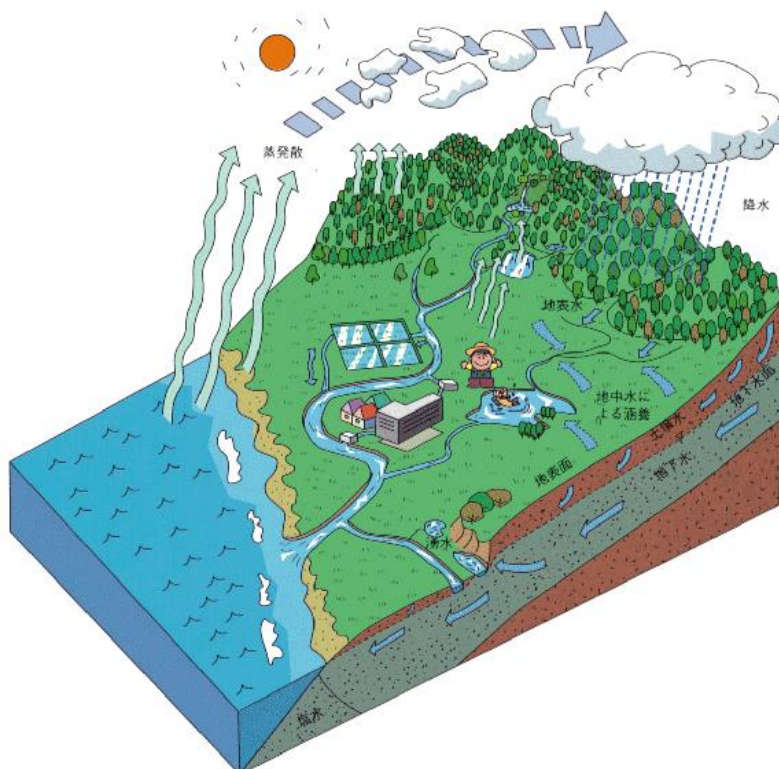
雨は地中や森、池に貯められ、やがて湧き出し流れ出して集まり河川となって流下し、海に注ぎ込みます。

私たちは河川から水を取水し、農業用水や工業用水として利用するとともに、浄水場で浄水処理し、水道水として利用しています。

また、私たちが使用した水は、下水管を通して下水処理場に集まり、処理したあと川に戻され、海にたどり着きます。

そして、海や川の水は蒸発して雲になり、再び雨となって地上に降ってきます。このように水は循環しています。

＜図表2-1＞水循環のイメージ



出典：水環境行政のあらまし（パンフレット）（環境省、2004）



## 名古屋の水循環

名古屋市内の水循環はどのようになっているのでしょうか？ 名古屋市域への降水量を100として水の動きを表すと、下の図のようになります。

2001年（上図）に名古屋市に降った雨は、約6割が地面にしみこむことなく地表を流れて川に至っています（雨水流出）。

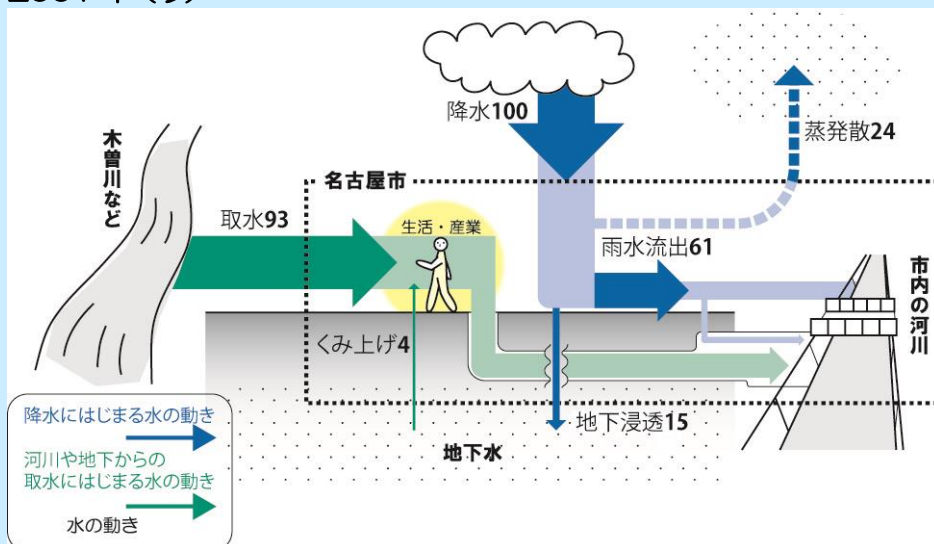
1965年（下図）と比較すると、地下浸透量が約3分の1、蒸発散量が約3分の2に減少する一方で、雨水流出量が2倍以上に増加しています。これは、緑の減少や舗装率の上昇などが主な原因です。

これらから、大気、川、植物、地面などの相互の水のやりとりが減っていることが読み取れます。

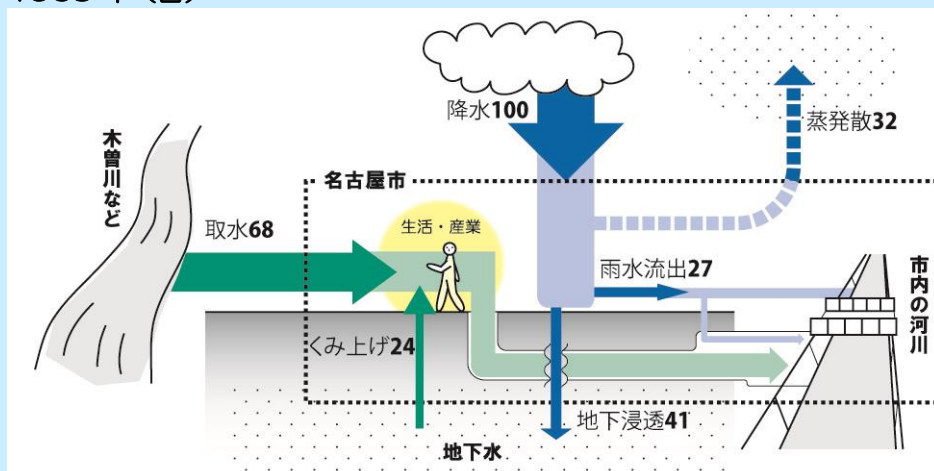
また、河川からの取水と降水の流れる経路をたどってみて下さい。2001年の取水と降水はほぼ同量ですが、名古屋市内に降った雨はほとんど利用されていません。

### ▼名古屋の水循環（年間）

2001年（今）



1965年（昔）



注：2001年、1965年の年間降水量は、ほぼ同じで約1500mmである。

図中の数字は、降水量を100としたときの値を示す。

資料：なごや水の環境復活プラン（名古屋市、2007）、水の環境復活2050なごや戦略（名古屋市、2009）より作成